

辰巳 当院は精神科が主体ですが、医療療養病棟と、認知症も受け入れている介護療養型病棟があります。両方もついている病院は、全国的にも少ないと思います。そのことの強みをしみじみ感じたケースがあります。その方は九十代の認知症患者さんで、最初は精神科の救急病棟に入ってきて、認知症病棟に移りました。その後、誤嚥性肺炎を起こして、身体合併症の病棟と認知症病棟を行き来していたのですが、やがて動けなくなつて、医療療養病棟に移つてそこで亡くなられました。当院は病棟が特性に応じて分かれているので、患者さんの状態に応じて病院内で行き来できるわけです。すぐく愛嬌のある方で、どの病棟のスタッフにも愛されて、亡くなられたときにはなじみになつたスタッフたちが大勢でお見送りをしました。ご家族が、そのことをすぐ喜んでくださったんです。当院がいろいろな機能を兼ね備えているからこそ生まれた、感動の一コマだったと思います。

精神科と内科の治療を
同じ病院で受けられる環境は
ご家族にとっても安心です。

Q 単科病院なら、患者さんの状態が変われば転院先を探さなければいけないわけですね。

辰巳 ええ。当院なら同じ敷地内ですぐに転科できます。やつぱり、お年寄りになると何かしら内科疾患をもっているケースが多いですし、認知症や精神疾患の治療を受けながら内科治療も受けられる環境は、ご家族にとっても安心できると思います。



この病院には内科もあるの！

Q 逆に、精神疾患を併発してなくても、内科治療のために入院される患者さん多いんじゃないですか？

平岡 もちろんです。当院の内科系療養病棟では、末期癌とか、他院で入院を拒否されたような難病、たとえばパーキンソン病のような神経難病の患者さんを受け入れる事例も多いのです。

Q 末期癌ということは、ホスピス（終末期医療施設）的な側面ももっているということですね。

平岡 ええ。当院の医療療養型病棟にはホスピス的な側面もあり、介護療養型病棟には介護施設的側面があります。

辰巳 当院では、「静かに最期を迎えたい」という方へのケアは十分にしています。たとえば、ご家族と一緒に患者さんの人生を記録するアルバム作りに取り組んだり……。亡くなられたあとで、「ここで最期を迎

えさせてあげてよかった」と、ご家族から喜んでいただくことも多いですね。

それと、医療療養病棟でも介護療養型病棟でも、季節ごとのレクリエーションを取り入れています。夏祭りとかクリスマス会とか……。レクリエーションのときは、皆さんにホールに出てくださいに行きます。これは、認知症の方にはよい刺激になりますし、少しでも癒やになればと思って、スタッフが頑張つて取り組んでいます。

Q お二人のお話をうかがって、宇治おうばく病院のイメージが大きく変わってきました。

平岡 どうしても、「宇治おうばく病院といえば精神病院」というイメージが根強いですからね。うちがきちんとした内科病棟をもっているということが、残念ながら、周辺の一般住民の皆さんにはあまり認知されていないんです。「へーえ、この病院には内科もあるの？」と、近隣の方に驚かれたりするんです。

うちは開設から半世紀以上になる歴史のある病院ですが、内科にも長い伝統があるし、スタッフもしっかりしています。内科は常勤医6名、非常勤医が3名いて、陣容からいっても一般病院と比べて遜色ありません。

そのことを近隣の方々に知っていただいて、内科疾患で医療難民になつてしまっている方にも、もつと当院を利用してほしいと思っています。

○ ありがとうございます。



取材と原稿／前原政之（まえはらまさゆき）

1964年 栃木県生まれ。1年のみの編プロ勤務を経て、87年 23歳でフリーに。ライター歴28年。